為村卿家集　上

和歌

629

内閣文庫
和書　類
二五四三八　號
三　冊
二〇一　函
二●　架

内閣文庫
番號　和　25438
冊數　3　（　1　）
函號　201　629

国立公文書館
National Archives of Japan

冷泉為村卿家集

春之部

元日

年も今朝立かはる[illegible]代々にまつる松の直枝も千代の栄ゆく

立春

山のはも雪も[illegible]かすみて[illegible]春の[illegible]

二月余寒

きさらきや[illegible]山かけ[illegible]風[illegible]

垣根若菜

もろ清のかきね[illegible]すくなす[illegible]

紅梅映日

日本政府図書

大学校書印

浅草文庫

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

ふりすさふるゝ夕日の影にたちそへて梅も色なる雪の村竹

水邊古柳

流れても持来ぬらむ川柳みとりの色そあはれなりける

江上春曙

波よするむ入江の春の梅柳霞みそめぬる花の浪路に

古寺春雨

こゝろみに折る花の軒の雫もしほるらむ春の雨かな

曉更春月

たえ忍ふかたみにかゝる月かけの花の雫もよるの春風

遠望山櫻

白雲といかさかしらすきさらきのやよひの山の花の木末も

苗代夕蛙

雨そゝく夕暮まてに苗代の水にのりつゝ蛙なくなり

樹陰躑躅

たへなるにみとりの松の木陰にて花さく山のつゝし見えけり

橋邊柳

春の風にかよふ柳のいとなかくかゝる池のはしに

野亭鶯

春の野の鶯まつの宿のまつへの春とこそ聞け

春曉月

たえ忍ふかたにむかふに咲く花の雨の曙のかすむ月影

深山花

匂ひくる風をしるへに尋ねきてこゝろ山の花そさくらと[illegible]

雨中藤

春雨に紫てる山の[illegible]むらさきなみの今日ゆかりの藤の[illegible]

氷始解

いまよりや氷とくらむ春風ののとかにふけは池のさゝ波

野鶯

霞ゆく野辺の[illegible]て鶯の声[illegible]らん

夕春月

花ならぬ[illegible]夕くれの霞ハ月[illegible]らん

花落衣

ゆかりあらは桜の花の袖にちりて[illegible]らん

雲雀

はるの野のあさ[illegible]雲雀[illegible]

遠帰雁

[illegible]越しけて霞に月の[illegible]帰る雁かね

[illegible]鶯

[illegible]鶯の[illegible]

梅移水

[illegible]

柳帯露

[illegible]

春[illegible]

こなたも六つすきなし花の月待くさすしもすらいなきとも

叔花夜

惜四も世さ行とも花を咲乃花ハしはしてもとふハ花も月の夜

春曙晩望

まちわひてあくるや清きのかけのむらさきの雲ありしもすむはなうしみ霞の中

暮天帰雁

ゆく花見もなれて春のよ帰るかたにいさよ一つはなつはら

花未飽

いつの世にあかぬ花ならぬかたみにもあはぬものをかはらぬ

花如雪

咲にし花咲あかぬ世をはめつる花はつかたち雪めける

落花満庭

散とみて花ちりくはるかにいる日つる庭ハ跡なしとも見し

暮春夜

惜きむかしもはるかにしむさきもあかす春を惜む春の夜

山中桜

山ふかみ桜のさかりさそふなり花にまかせつる人まれなる

花下

おもひいてゝ待ぬるさくらゆへゆふへの桜花に帰るかな

禁中

ゆくへ咲花のにほひまかせて紬さへゆくへしられぬ人

閑中

てふをもわすれぬらむ桜か枝ハ比ともさそハれ気やら花笠

禁中、

いくとせ咲川よしのゝ九重の花ハこゝろのまゝ色そえにけり

庭上、

吉野山をもとめておもひ咲見ぬに松もみさくらおほすなる

寺辺、

ゆく人もまれなる世々に咲花をそ見るあふ坂清寺

岡辺、

あかねともおもひぬ岡のさくら花にほひハいまも色そめて

樹陰、

おもすつのなつかしけれこ花ひとの行てもゆくハふさくらハ

林中、

時ならぬ林の中にあそひする桜乃色をあつめし

遠村、

とほくとも行てもみえぬ桜花ちるころ一むらの里の一むら

瀧辺、

山桜ちらぬ花さへ中々にながれてこそ白くみえける

社頭、

ちはやふる神のみ袖をはへし神のことまて咲さくらハ

池上、

池のうへにうつる桜の咲しより花をみぬ日ハ波も

湖上、

[illegible]咲し[illegible]花乃[illegible]

樹下〃

旅人もとまりつゝ[illegible]山ざくら花の[illegible]

海辺〃

[illegible]花こそうつしこ[illegible]咲る花

湖上〃

[illegible]

城辺〃

[illegible]花の[illegible]

旅泊〃

[illegible]

霞遠峯

[illegible]霞[illegible]の[illegible]

竹籬聞鶯

[illegible]の竹の[illegible]

水辺柳

[illegible]柳[illegible]

深夜花

[illegible]の[illegible]

花間鳥

[illegible]花[illegible]

摘菜

一夜経し[illegible]にも[illegible]心[illegible]

山田苗代

なはしろも[illegible]田の面に山[illegible]

揚雲雀

春の日[illegible]柳[illegible]雲雀[illegible]

翠玉映

水[illegible]深[illegible]みとり[illegible]山[illegible]

落花遠松

[illegible]松より[illegible]松[illegible]

花葉風

香[illegible]花[illegible]のゝ[illegible]

渡浦花

花の色は[illegible]山の際

雲間、

咲[illegible]花[illegible]雲の[illegible]風

曲渓、

[illegible]

花帯雨

[illegible]花の[illegible]枝の[illegible]

野雉

[illegible]

花歎人

らくしおりよしのさくらは嵐山峯の山吹さへそ見初て夜

松残雪

はるあさみ見えしまきの松か枝に残る雪そまた残りける

都霞

君か代とかすみのかゝる都をは雲の上にたちしもの空

梅花落

このよりは梅の香も猶身にしみてむかしの夢にほふはるの宿人

柳緑

柳かえなひく青葉のいとはやもかゝる春日をなかきともなし

田邊柳

ますらをか小田かへすとてみし岸の柳の影にかくれ見ゆらん

春月

山の端にかすみもやらぬ月影のおほろにかすむ春の夜の空

春雨晴

このめはる花まつ人のこゝろをもはるさめなれやいまはしるらん

隔霞遠雁

かすみこえ行かりかねの横雲にまよひもやらて一つら一つら

尋花

さくら咲なかはみねの花をみてたつねもゆかむ春は嵐の

摘蕨

やまさとのわらひのもえて春の野にたちまよひつゝ摘てこそゆけ

霞中

き花のあたりにこともえてきこしゝ霞もしらて春ふるの鐘

雨後

うれしてや咲し桜のぬれ〳〵て花はよそに露のおもかげ

落花如雪

ちるをまたいはまほしくなる人のためにあらましもかたみの花の雪

款冬

花はこのちらぬを見えてそ八重にさく露も千すゐ出の山吹

池藤

いはまにもちるそてその藤なみは咲かゝる松にうつりし袖

惜春

いとゝなと花は日数にちるをみてちりのこる日数はいくかあるらむ

島霞

淡路しま浦のあまの波のうへに千すかてる雲の色も見えつゝ

帰雁

わかれゆく人の咲花をみすてゝもかへる雁かねしるへなくとも

子日

子日して小松引けるをわけて千よのためしの春の野辺かな

残雪

こゝ山はさえさむきかな春の野にきえのこりたる雪のむら〳〵

春風

梅かゝもこえて千とせの松の風のあはれなる春の夕くれ

春曙

いはふへきなかにも千代のかすはわかにはに根さす花よりそしる

早梅

わかやとの梅にこそ見えてこそ花の色をうつす早の梢

春雨

はる日かけのとかに見えてなかなかにしつくもとまる春雨の柳

遠柳

風ふきてたなひく柳のいとはみよ遠のさとのをちかたの空

山花

山さくらかゝる雲井のかけはさなからさきしつるさくら

春草

雪はらひともに若草の下もえてこほりとくらむ野への一はら

杜花

春風もこえてみなみにさそふ花の色のさかりの森のしたかけ

水〻

はるかはとけしのとけき水の流れのおとやけふはとのかに

春雉

春のゝの霞かくれに朝たちてきゝすなくこゑそきこゆる

藤蔭

立よりてかけもたのむの藤浪のかゝるなかにも松にかゝれる

暮春

花ものなこりもけふの暮の空にことしくもしはしとゝめむ

河鹿

うすかすみたつるかしるの雪路ふう霞もにほみ

雪中鶯

なきそめしけさもうぐひすの声のしらせなるとて鶯のなく

門柳

杉むらやこのかともりかけのまへかりて青柳のいと

関花

咲花の関守さへも春風に庭の花とやおもひつゝ関

旅庭

うすゝく露のやどにも旅日数出てうつゝに春道の山

簷梅

うらゝ梅すめてとゝいふ風数わなすめる軒く句ふ梅く

春曙

のどかなるうらにこゝもかすみゆくゆふべの月の影もすめるは春の曙

旅宿

咲ぬべき家路にいそぐ一枝を折てぞ花を宿りにはさし

池蛙

夕ぐれの池の汀にしづみぬる影はまゝにか蛙なくらし

柳無風

青柳はこゝろしらなくわきわかくかなかれのゝ春のゆふ風

若菜

雪間にも野辺つむ日けふのみつゝ乙女の袖も露にぬれつゝさき

[illegible]

松の葉も秋[illegible]雲の[illegible]葉の[illegible]

紅梅雪

くれなゐの[illegible]も初[illegible]の梅枝

春夜

ますみ[illegible]春の夜の[illegible]のみ[illegible]

庭花

花さそふ[illegible]世をわすれて[illegible]

岸[illegible]藤

[illegible]池の岸の松がえにいくせかゝれる花の藤なみ

庭非郭公

時鳥大内山[illegible]庭や[illegible]

田家春

[illegible]山田の[illegible]

待鶯

[illegible]の戸を出る鶯の[illegible]

暁更梅

[illegible]の花の梅[illegible]の香も袖[illegible]

夕梅

[illegible]の梅の[illegible]夕へ

柳

[illegible]みとりの柳[illegible]

花留人

よはにふる雨にしをれて手折ても露おもくなるかけのしつくに

雨後花

花の枝や夜の雨のかゝりても紅にほふらん花の色香

落花

さくは花のさきのなかめもおほかれとはちるそことの木のもと

蛙

春雨にすたく蛙のこゑそふる苗代小田のゆふくれのそら

款冬

八重一重咲山吹の花の色に流て橋も井手の玉川

春欲暮

花鳥も春の暮にはなけくらも柳も露にむすほれつゝ

立春風

いまは春をしらせかほにふく風もとけいるかなちりくの霜

霞中梅

鶯の声すゝめてにほふらん梅か香そへて霞のうちなれ

暁鶯

まつ梅に窓の梅かえうくひすのなくなへあけてきこゆる

雪間若菜

こゝもまたゆきまをわけてつむはかな野辺のわかなの

堤柳

池水のこゝろの色をやへかけて堤のいとの柳かけれ

春月

行まふ人まし秋の色も一しほ也や桜浅秋の花の一ゆかり

杜春雨

見わたして青みわたれる人もなし春雨ふれて杜のわか草

深更帰雁

あはれなる世をもすてんか出る帰る雁いまた春の夜のかりかね

春鶯囀

あさ鶯もあまたや宮のこゝちして春をへてこそいふなるらし

翫花

盛なる色香めてゝハ春の日の暮るもしらて花のもとかな

見、

花のかにかくてとまらん道もなし世ら風さへなる花のもとかな

庭上落花

春風のさそふ桜も庭のおもにみてさくらかいたし

天外遊絲

空にみあかる雲のいとゆふは中に乃霞となりてきえぬかな

摘菫

あかなくに折てそつまんむらさきの色なつかしき野への菫かな

河蛙

川なみの音も流しのとかにて井手の蛙乃声とかや

夕苗代

夕されハ又ひかりける苗代の日影のこるゆふは水やへさ

折躑躅

一えたはをりてゆかん松かけの清水か花のおもひでのこし

款冬岸藤

かはきしにのこるは藤の咲かゝる岸山吹乃花見えける

瀧下藤

山川や松乃木かくれ瀧津せにかゝる藤浪のいろ

残花

花の後春の名残をとゞめてや咲のこる花の色そ見えける

雨後花

山の端の梢もみえず降くらす春雨乃後の花そまたるゝ

深夜藤

吹風も寄せも松の色の浪かへりをちこちの

故郷梅

春は昔に見しにしられぬ跡の宿人こそあらね梅か香そする

春暁月

なほ霞む明わたる夜乃名残のこゝろにてみつ月の影

春夜遠

久方の空とはかすみ霞にまかふ杉の木の一もと

柳似絲

浅緑乃いく筋なひく江村の門にかゝれるいと柳

嶺早蕨

おのつから山路をわけて峯の上の清水にむすふ早蕨の

花初開

ゆきしらさと思ひてむら[illegible]山花のさかりに

杜款冬

ちる花[illegible]桜はもりて[illegible]山吹

杜上藤

こゝ[illegible]まて松かえのいく世かけたる小山の藤なみ

残春夕

情しれる人も問しらなくて行春の[illegible]

初春松

色深き松の千よ数世ゝ重ねて[illegible]

梅風

我袖に深くもしめる梅か香を追風さそふ軒の[illegible]

牧春草

[illegible]もえて出るの[illegible]春の[illegible]

帰雁

春の夜の[illegible]帰るなり雁もなきて[illegible]ゆく

雨後花

春雨に[illegible]咲いかに[illegible]花い[illegible]

池藤

吹風ゝ[illegible]藤波の[illegible]池の面

首夏

[illegible]袖[illegible]衣かへ[illegible]

春神祇

はらはぬみかきも春たつ春の日の恵はあまねく天か下まてゆく

春風

まつ一はるきぬの柳くしけつりたに松雲まよ枝ならさぬ風

春雨

春雨のめくみ何は物くさの代ゝにかはらぬ雫清民まて

春駒

おさまれる日新くる春毎に千とせの花の色そめてし

春山

こゝのへにほふ春の色をくもらぬ雲ゐのすめらみのこゝろ

春野

けふもきくのとみかは野人のとまりて春毎のなれて野とてもあそふ

春海

のとけしな波風たゝぬいく千里遠舟もゆくな春のうなはら

春河

あらたまる御代にいはひて龍田川のなかれのたへぬ波

春池

咲かゝる松の藤なみよせてくるつるも千代の池の長さき

春雪

春の野はきえとりのこる小草も萌きさ通ふまてゆきて

春山乱

谷水の声もきこえて花さかる山の家ゐのいはほ

春旅

猶とめて知かもまよふ花の陰ゆけはいそく旅ねかな

春述懐

逢ある身のきこゆる花のゆかしきに人はあらすな花もあらすも

故郷立春

たちかへる春のふるさとの霞かは宿の昔をとゝめてそ春

深渓余寒

谷川やうち出る浪もさえかへる玉の行衛にのこる雪かは

春浦花咲

しら浪を花とやみつる浦の春のたちはにまかふ花の浪

落花客帰

花ゆへにいそく心もおくらしの木の本にのこる行衛をいかにせむ

雨後苗代

みなくちに今朝の霞もはれやらて苗代の田面にかへる波かな

余寒

さえかへるあらしにつれてきえのこる袖さえの雪

遊糸

春の野にむすふ霞のたえまより

水辺花

咲かゝる岸の柳の花の色

蛙

雨そゝく池の汀の

河上霞

三ほ江のあしへのいつもとゝなにそめゆ浪のいつもの波乃

春風樹

吹かへる山風よわき新しく見しる人もみなれぬ秋乃風

花盛

まれつゝ花もさかりにさきにけりこそ見し人の心ハなし

観春

根ゆくゝ花や咲は春のうつりそめ帰る木のやまの山桜の花

夕帰雁

波まちる花にちるらんゆく月かけに帰るなりうらの霞

暁聞鶯

新たなる梅さくやとのきゝなれし春のあけの鶯の声

柳靡風

吹よする風のまにまになひくらん柳の糸の清えぬかたになひきなん

折梅

折そへし風もこゝに梅をれ袖にうつりか梅の山さとの

雲雀

やといえもいつあかるらん春の日の空にあかるひはりなくらん

池辺梅

咲梅のうつる池水にほひきて春の月よに池の水の波

初春

春立て今日よりはれて日影のとかに霞むらん

若菜

波路[illegible]さかひも霞て[illegible]かきらぬ波の上かな

海辺霞

浦ゝの風もなきける磯まつに汐浪の音も[illegible]霞

野若菜

雪まきえしもえ出る若菜[illegible]つむ[illegible]

里梅

さと[illegible]のあたり[illegible]梅の風の香そする

柳

咲[illegible]のとかなる風の[illegible]みたれて[illegible]のうへの柳

春雨

ことに雨ハけふも[illegible]花の[illegible]さらめ

帰雁

[illegible]花の山越て[illegible]一人の[illegible]

栽花

[illegible]千代の花をもちきりて[illegible]待梅にて

鶯

[illegible]もまた花のさかりを[illegible]

雉

いさ[illegible]きゝす[illegible]春の野の霞の[illegible]

夕

山のはのかすみの[illegible]月の影も[illegible]春の夕[illegible]

暮春

らし野は岩手に帰るともしらぬ花も芽も瀬にもちぎる

雁

雲や雲中のことわりもしらぬ春のめにみて雁なりけれん

鶯

宿は竹梅にはさへつれども野の色にしもさえてなく妙

柳

咲かんさくらも糸にして春の色に青柳の柳の糸もみえん

蕨

宮河野にえのめぬかり比とつ野への若草に生の出さわい

燕

花の色も新緑もちぐさにさくらてそれを見とちりて盛りそ

桃

秋よえん西王母か桃をも仙桃たてし桃の実なる花

梨

きふみとも見ても日かけしは梨のきし実をも雨つちの葉

鮎

いはゝもいはすむ岩こえてかへるいる鮎とめつら

蛙

ぬはくさいに池のきにかはなく声は蛙にて鳴

菫

はじ秋もいさなへとまんはさうの野をはなさて春の野辺

萩

こゑたてぬかりかけもよそにみえて舟よするゆふ日のかけの冬

齋

一しほの若緑の松に花さくといつかたのしむかけのはつ春

初春霞

山の端も白ふかくかすみたちにけりみよしのやまは霞しるしに

春氷

とけわたる池のさゝ波風そへてみえし水の影もさやけさ

雪中若菜

神代より若菜の春のいはひとてけふも野へにつむ若菜かな

初鶯

世にいつる谷の戸出ていとはやくまちかねつるの鶯

門柳

我やとの春の色にはふきもまた夕の風にみたれ青柳

池一ノ和香

春にまたいまた見えてかはらのきしは霞みへて一しほゆらし

旅行春風

行年の我にゆくへもあらしをかなしき旅の人そすくなん

秋春雨

春雨の空よりふりて花さきを春のめくみにまかせぬる哉

為家

たえぬいまたえかたの芽も梅て咲ぬさかり春のさかり

柳ゝ

山人も手折てかへる一えたに花ちらぬ春をのこすらし

三月三日

あひにあふ光ともまつ見せつゝ千とせの三日哉

款冬

今さかり井手の玉河行水に影さへふかき山吹の花

松藤

とこしなへ千代の色なる松にかけて咲らし

三月尽

はなもはや春の暮ゆく別をはをしむにかひの雲のはてかな

立夏日

かへてや衣うつる日も夏の今日にかはる空かな

霞

和田の原見えし河へも霞こめて沖津白波

鶯

雪のうちに木の葉もさかぬ花の声きゝてまつ

紅梅

色かをは袖にうつしてみぬの梅の色香も色も

帰雁

春くれは雲の上ゆく雁かねの帰る山路の峰

藤

十かへりの花を待えて松か枝にかゝるもしるき藤波

原上霞

色ゝにさくも花のうへまてこゝろよりさらにも春のなかめなりけり

霞中滝

山姫や花の衣のすそまてもかすみてかゝる布引の滝

若菜雪

春なから山風さむくちる雪にいつかわかなのうへにふるらん

梅移袖

おりもてしかをりは袖にうつりきて梅の木のもとにたちよる

柳垂糸

浅みとり糸よりかけてなひくなり春のかせにもみたれ柳

湖春月

湖にうかふもおほろにかすみつゝ千里の月の影かな

秋田一人

御ことにも春のさかりはをしむらん花ものとけき春のゆふくれ

花前人

色も香もいつれあかぬを花のもとにたちよる人のなかめをそする

、款散

春風もいとゝ花をしのふかなちるにまかせて花の本にゐて

河款冬

行てみん春ハ山吹の影うつるいてのたま水井手の玉河

藤懸松

紫のゆかりの松のこすゑまてたちそふ色にかゝる藤波

三月尽

立出て来れは此をかきりて思ひ出のみにしみかゝりつゝわたし

花

九重にこゝろにいりし花盛り過ていく世をすくしきぬらん歟
いかにせんと思ひたえたる夕暮も花の梢の春にしらぬか
咲ころもいかゝはすへき雲のうへの花のためなる風をいとはし
待きつる心はさなから日数をも花を待ゝて世にふる風

南枝暖待鶯

さくら谷のかたはらに咲花の深山の霞にたちやおくらん
三吉野山白雪のいまた梅か枝にうつるけしき見ゆらん
とはれぬ南のかたの枝はたゝ梅のにほひをまつ時もかな

見わけすみ分かれぬ梅か枝のにほひに一声をなくらん
咲梅の花に鶯の声をきく時のまに待わひける梅の枝に
白雪のまたふる中に梅の花の匂ひて深き谷そうくひすのなくらん
はるの来る梅のこゝろの梅に鶯の春の香に知る人もなし鶯
いとはやき春の朝の梅の枝をまちて木伝ふ羽風ならなくに
鶯もまた声をしらせ春のめくみ初枝に花咲く梅にかよふ鶯
よそに見しも春のこゝろにのこる風をまつらん梅の月日のへ
初音まつかたしく夜半も南の枝の春をまつらん
我身のまた冬の空をのみ梅に来なれて花のにほひの枝にうつりて
鶯もまた声をいまたけしきの南の枝の羽を春に見よ
咲梅に南の枝の雪の下をまちかねる人もわかなへ

ものしけふ春日のしなく鶯もなく今のこゑは春の例しもあるらん
此ころは蘭のこ枝咲梅にあはれにてみをもしめしらはす
月のかたきならしよりさらに梅もあはれまさりて月なく鶯
江の蘭梅も柳も千山月に鶯なきくところのうつりなる
みな人のうさにかゝりける梅こそ開きて春のうつりなきの竹
春日さ千うさゝえの梅の花はさこゝにさなくてうつりけれのあらせん
うつせ今はやくてうちすさふらく蘭のこ枝のあらしの風
のとえも鶯やま梅つれの花にとめて知らくかくこえて
もとつ色ともあのむふかくさえよ見き郭公なる良木此めてをの鶯
雪ともに蘭のさのは鶯の声のかけはるかは梅にも猶らし
花よりも鶯さへ咲梅のこゑのこゝろの枝のこゑのこゝろの香
咲花もかくこともの忘の梅に香りあれふよは春の色鶯
鶯の香にまさるらん鶯とく池のこ枝に梅はかなる月り
うちはやすまさりつゝもきて春日千寸南の影の事ならなん
春日さ千すみかたゝにたのしむめの枝よりまさりてうつらはの竹
かなしきあはれにもさ千すの梅にかけ春もうちさかや春のかたの竹
青柳よ見へてこゝろのまさきなる梅つれ南も家に声はる枝の春風
此月の色こ梅に咲梅つれの声まもすこし春のうつらんかた
梅と今日まふかそも思ひこゝよりかは枝香もくれぬはうつらはす
月らけさ千す蘭のふく枝咲梅に春声ともましてれはふく鶯
守らぬは里の香きかにそれまことあみちりて咲梅の梅の立梅も
兵衛らうて竹の色なるさ忘れまくうつも春のうつらはの香

はるのみやこそこの梅も咲ぬれは御代もちよかきるよろこひのうたかな
ちらぬ千とせまて南のそらまてにほふ梅の花のねにさけん
のとかなる春の名の梅か枝にとまりて鶯も清らなる
ありけれはこれもむかしの心の花の梅か香にて花もかはらぬ
はるのはしめの梅か枝にとまりてなくらんとしもそら那
春柳のいとのよりかけて青柳にいろまされるかなくらいす
いかなる月のこと枝時なく梅か香にたへたるなくらむ鶯
東にも吹風をまつはかはらぬとてをのかすみかはらぬ心
めて鶯は春の山のはに霞たなひきてもみちのことくらむ
あまたの色も袖の梅枝にはらはぬ露のかけもなくらむ
鶯もうめもろともに心のこしみとり咲るの心も霞の

はるかなる梅の花の梅か枝になくなる鶯のなきわたる新年
春は千とせの梅か枝にすみなれてちよのはるの哥
鶯もうめさかりに梅か香にほふ雪の色のさかりのはし
咲ぬるもうるはし南の梅か枝に青柳の色のまさる鶯
春は月にうつりて春の日も梅か枝にいろは霞たなひく鶯
とうけもさきかほりの春の日の野辺にさかぬ花もなし
春は山の梅の花の梅か枝にさきてうくひすのなく哥
ある春をいかにせん梅か枝のほとにさかなむ鶯清く匂
はるの花は行枝の梅の花の色かはらぬ色の梅かな
春霞たつ千とせみちのくのこゝろも梅の春にうつる鶯の哥
梅もいつも香の行へそれ咲もかはらぬ行枝にさかりけるをる鶯

出家も見つゝなれ年咲梅も[illegible]さはさえまさくらん鶯

けふよりは[illegible]年に[illegible]の里に梅の[illegible]し

こゝろみに[illegible]梅のえたにおりしらぬらんすみか

思ふ日の[illegible]梅の[illegible]て[illegible]ならん

雪とは南の宿の梅[illegible]なさけあるかならん

日のめぐる[illegible]の[illegible]ならん[illegible]かの[illegible]

梅かえに[illegible]梅のきさらぎの[illegible]

うくひすの[illegible]花の[illegible]なけかん[illegible]鶯

日の光[illegible]梅の花[illegible]ならん

けふ[illegible]もの山[illegible]鶯の[illegible]

日のめぐる[illegible]花の[illegible]ならん

秋よりも春[illegible]ものおもひの[illegible]うくひすの

けふ[illegible]梅の花のにほふ鶯[illegible]

花の日のめぐる[illegible]鶯の声[illegible]松の枝

うらやまし[illegible]うくひすの[illegible]

香をとくにほふ[illegible]南の[illegible]梅[illegible]ならん

鶯もちる[illegible]日のめぐる[illegible]梅の[illegible]

うらやましの[illegible]梅のはな[illegible]ならん

咲[illegible]のむめの[illegible]

よそに[illegible]日の[illegible]梅の[illegible]

うらやまし[illegible]

めぐる日の[illegible]梅[illegible]花の[illegible]

この宮ゝれは春のはしめにさく梅をさきたてゝ一しほ梅の匂ひゝ
菅家はまことにはしめより梅の花をめてさせ給ひていかなる故にや
いとゝ心をもはなれかたく思しめし梅はなにのこゝろそや
はるかなるかたえの梅乃花風にさそはれて猶ほのかによりて梅の
かをりのふかき松にて香の宮の梅ゝ御ゆかりの事に
ふかき御いのりの御事を思召けるに梅の花の香風
にほひすなるは梅のかくれなき事とは梅の梅の匂ひ
咲けはおもしろき梅の花の匂ひ一しほまさりける
はるかなる梅のかたみのゑもいはれぬ梅の匂ひ
のかたちよりこの花にも梅ならぬ花なりけり
此ことも春の梅のつかさをつくりまつりて

いとゝ心もあはれなるにほひすなる梅の匂ひの梅の梅の
花の色も見る人ことに梅のかをり一しほの新

花宴乃事
されともさすかに春の花のさかりをみるに
やまとにも春の梅の花のさかりなれは梅のはなの
さかりてこの春の色は四方にかほりて世の中の
梅の花の梅のはなも春の色のかほりけるは
よのつねの花と梅の花の梅のなさけの色そ
あかすとていつまてもと思ひて梅のゝ花の世を
ゆきかふ人もみなこの春の色を梅の
この世にはあとの梅の花の梅のはなのさかりの

ともゆしもさくらへしさきさくら花やよひのまのえちらせけりし
あくすらんとも春にはやよひの花はまよめ、ちかはちりて
あかしさそこゝへまとゝきくら花はさまさのえのみいとゞ
よ世のえも咲さへよし此やの花はなれちやり花のしのふ
ことのえのちかさらいつゝもさくら花ちとしものえのさそふらん
うちよれみよしきのちし此やよのさくのはなしのめつらしと春れ
咲花あしみよしやちらさり桜はなれいくらかたし花よみよはらん
さくらちかすみ春もちかすみ秋もかくりてよ春花のさくらは
ことの内紅葉の松は枝めしえ花なりとその花らせらし
紅葉にとはてもれふ花の世もこんゆ春はいくつきこのちかはく
花ゆくもと春もみはいて常やまゝ花のふよとその花は散らん
咲匂ふ折紫花も此やよのかなはいくそのことちせきとは旅
世のことはいらんゆきやみよもと香のむそこの花の色にて
ほらのえんこゝろくらりぬ花もちよもてよりにほふちらむ紫ちもやいくよ世
咲花乃色香いくらこのえはほちか此のえ咲ちりもさらかとか
咲むかん花や咲の世此君花のえぬ花もとこの紅葉やれしか
さくほふかしもちらしよのさしめれて花みよ咲ち花ぬあのめし
ことの内松てみもさともちよさこてさて花のよいすみのはさそうの世
ちぎりをくやよの桜にみよの花の花のあの咲く咲よほんん
千代のこゝろめかくらむ此もん此花のかはこゝろのめか花は代ハ紫て
さより折へのきてゝいくかもこつかすこ花ぬえやちらさん
こうやらちはやみかく常おいに花のよめよるぬ紫こゝの紫

ゆゑにおほよそこゝろすゝめんかたへいふこゝろをさきとせんは昔をおもひてさらにて
いにしへよりさかりにはなれて世をしのふ常のならひにそのかみをもさまもなく
これはふるき世のさまもうつして常に比をいひそめしをはしめにはならす
それより此世にかはりてこの名をあらはしてこゝろにしるされたる
さらに古きをこのみて心に花をそへて見るらんとかしこきもいふへし
脇句みなこれにしたかふへきなりいつれもこの心をつくして常にありてこそ
いにしへのみなこれにそへてこゝろをつくしこゝろにかなはてはあるまし
ねなかすみなもとものこゝろもおもひしらてこのうたの心をえんこそ

葉外歟

古葉ハとてこゝろあはせてこれを二十余年にわたりて撰ひたるなりき

當時ハわかきたこ人をかたりてはしめのうたなりといへることは
ことはをもちひてあらはしたるものゝ名をもしるして古今と和歌
なと萬葉の和歌にもしるしてうたのこゝろにはあらすして古今と見え
萬葉なとをはしめとしてこれをも和歌の古今といふは
和哥のみちをもしらすしてことさらにかなふへき心のまことの姿なり
和歌の心をさきにしてうたのこゝろのこゝろをくみしるへし
この和歌をしるへきにはあらすしてよくかなふへきにはあらさる
むかしの春をそこなはすしてこゝろのまことをしるへき古今をもとめよ
和歌のこゝろの萬葉にしたかひてこゝろのまことをうつすなり
このほかにもこの心をおもひて和歌の姿も風情ものこりなくしるへし
まことのこゝろをしりてうたのさまをあらはしてあまねく和歌の道をまなふへし

暮春藤

咲しより日数[illegible]藤か枝

藤[illegible]

[illegible]藤の[illegible]

[illegible]

[illegible]

藤[illegible]

[illegible]

[illegible]藤の花[illegible]

[illegible]

[illegible]

野雉

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

子規の事は逢ふ事をも[illegible]すへからぬ事なとてやうく
定家は題の詞をよく〳〵よみての事をすへきものなりとかや
又の事とも心詞にもよく〳〵わきまへなきをかへりみすもとなへし
題をまつよく心得て後によみいたすへしとて又なと心あり
うき事あらは心をも身にかへてよむへき[illegible]詞をいひすてゝいへるなり
定家卿もそのさまをよく〳〵よむへし されはこの事こそかたけれ
事こそ心をもてなすへきなり 心詞は[illegible]よむへきにやとそいはれける
詠むことも心をつくしてよむへきなり[illegible]詞をかさりてよむへし
又の題をよく〳〵心得てあかぬ事をもよむへし[illegible]事の心をしらん
哥人はよく心得てよむへし[illegible]事[illegible]きこえす 心をつくる
かの心をよく〳〵思ひてよむへき[illegible]哥をもよく〳〵よむへきなり

ちかきをよそに思ふ事のいかなる心にも[illegible]哥のよし
猶此事は心詞に[illegible]かへし事にかなひてあるへからん
いはゆる哥の心をみなもとゝして詞をそへてこそよむへけれ
白すさしのうけ事の事とを[illegible]ことすなはち歌詞
詞くはしくいへとも心の詞に事とこそよみ出せ
是御返事にあるより題の心を[illegible]
定家卿も哥の心を題の心をよく〳〵書とて題を
哥人の題をよく〳〵よむ事のよしをよく〳〵いへは
猶よりよくきこゆる事も心詞のさたまりたる詞の事とても
事とはいかにもよく[illegible]題の心への題を[illegible]
いひきこすなれはよくいひて[illegible]心ある事を心ゆく書とゝめける

こゝろさしわかみよりもすゝむ春のなさけをしりてみそかなるかな
あさくやうらみのかれをもとすもなきつゆのきえしはかなさをおもふにつけても
いつまてかはらこひとをもおもふらんとてこそすゑもしらしくはうら
すゑはひとやまかけ人の入ぬるをこそすゑしらてまつ
なにみちのあとはなれしまことのねかひのきよきにかな
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

御心にあらはれぬのかよひもまことにたのもしくこそやさしけれ
ゆめにもすゝむ心のしるしを見はてぬ末のあるはるかなり

早歌私

水きよみたえぬ井手のさとにて花の咲く岩ねの山吹の
河かとも見るやたまのゆきかよふ岩ねの山吹
咲えて岩ね山吹咲にほふあたりを名にける井手の河
花の陰にしはしやすらひてもろひとのこともなる山吹の
よしの河の岩ねにかゝる波のをかす山吹の
ゑたなすよ咲る岩ねの山吹の花の色
枝かはす陰山吹の岩の中に
咲のこり玉川のきしの山吹

らし堂にはさくられたなの一條より岸なの藤もありけり、こまかに花
ちるなしもそこの花咲きてあはれけるとしれ山吹の花は
河瀬なる山吹の花うつろふも猶たえず岸の山吹は
吉野には岩千歳の花の色も見えて霧立ちしれる山吹
家なりしこそうしろ川の影に流るゝ山吹の花に
其のなりしもあはれなる[illegible]山吹
新らしくつる岸の花こそ山吹の花も流るゝ井手の玉川
今井手のさくら追ひ川岸にさきたるをみて山吹の花
色ふかき波の花は[illegible]山吹の花
晴[illegible]山吹[illegible]
[illegible]
[illegible]山吹の[illegible]

水[illegible]山吹の[illegible]
[illegible]玉川[illegible]山吹の花
玉川[illegible]岸[illegible]
らし玉川[illegible]岸の山吹[illegible]
[illegible]岸の山吹の[illegible]
[illegible]山吹[illegible]
吉野川[illegible]
山吹の花の色[illegible]山吹[illegible]
[illegible]玉川の岸根[illegible]
[illegible]河岸[illegible]
[illegible]岸の[illegible]

迦しくも加々見え、咲白雲をたえなれ立ちしられ山路に
岸よりも流るゝ滝の落ちて桜ちりけり吉野の山雲
こしたる花をかけたる折々にこそ見ゆるらしに山桜
桜が井の日岸の山の春を流れ出でて下り来もかゝる山々の
一えんにはれきらゆらん川岸の咲の花に山々のなれ
岸ながらえてさかりけに山かぜの花ま是にみよしのの川
河清く桜流るゝかゝり岸ながらまみえて下るさへ山桜乃花
らしく聖にさしかゝる花の内方へ落ちて吉に山桜の名
ゆかしき吉野にのみて山守の花吹の清にみよしの川さし
もかくおもひけ人に見せるゝ岸の山守
小川乃岸を咲き山本の花のみよしのに見ゆるを

河ゆく流れ川して咲流しいろへ心にかゝる岸の山さき
岸の辺りにもゆらむ咲なるまでもまさく花の下らけ
水清く流れて岸しかけさせゆめにかきれけむ山桜のふれ
井乃いふもの宿をきは数に山桜の花さえまゐ清くこそすゞし
咲もひいて桜ちりかゝる山本さきのいろく流れて春のやよ

冷泉為村卿家集

夏之部

更衣

夏きぬといふより立えてくれなゐの色をしみかひなき花そめの袖

惜更衣

ぬきかへし色も花染の袖なからなほきつゝまさるものかは

初郭公

一声はさらぬなくにも待えしをなほ初音にほとゝきす

夏草露

夏ふかき草葉のすゑに風こえて秋のこゝろにかよふなるらす、

郭公頻

咲ハ花と花かもにけて立よれは影さへ寒き松の下の雪に

柿標

夜のあらしかうし包みけるをかつまかせし咲ほか花さき

松下家

松竹の黒木の陰も心にて消えてしまひて行けは

寺部正

一志花も世をゆるかすへ行きさまに松の下ふかくさんの入ちく

美作

一声はほのかなる峰もきこゆ水の蔭ものなへかさす

竹間夏風

さえさえて月のうちさき夜半ハ風も竹の葉の竹の音なら

野夢草

此ころはおほつかなくもなきはかり人の夜なき

瀬輪

うらは舟にしつまてゆけすゝしこの川風かりつれゆくのけ

網源風

立ちよれは松のあらみ一声の秋かせもなきはかり

谷部正

生けて鶏代をわかれてさ寸宿の末に乙れ古志のもん

岩

ほとゝきす空をもて行くかへりかへりの梢根より尺一ち

野

ゆく火人なきにかけて知らぬまもすからつの家ともしなき

関ゝ

あふさかや関の戸ほそも明ぬらん山ほとゝきすこゑもきこえき

海ゝ

こゝ波のよせくるうちもいはまにて浦つたひゆく船のかなしき

人傳ゝ

秋と文きゝしいはんあるすなす人つてならぬ一筆もみな

山田早苗

あさ日かけさすこともの山田にてとる早苗さへ水田のみなへ

遠嶋蘆風

百敷のいむつかしくぬれて風かはらぬそてあはれなるらん

沙月遠蘆

さえ渡る風くしまとすゝむ夜のあかぬ月をみ水色

鵜舟迴篝

河しもすゝ帝つにくれんとすてに河鵜かゝるかゝり火の影

五夜照射

唐土も今めくらんわか宿の月といく夜もつてこゝはまた一ゆ

蟬聲帶露

桃まさ紀たゝなる出しらぬ夜て高きなれんとこ夜のとま

蛍火透簾

ゆふかせもりたにしへたくるすみ遠きに塚のこゑ窓に

卯花

時まへと衣しつくあらす今はなにはあかにしねく神のまつり

神祭

かおやまやたゝりの波の馬車在もあはぬふの神事

郭公

ゆまえてあつまりつらしかもよすかそらをこかやまよりたれにか一声

菖蒲

いのちの長きをいのるあやめ草はのきの新玉もかけつる

蚊遣火

かやりたくけふりふかくも立かくれしのつゆもいふせかりけり

夏月

ちるはかりそらにすゝしき夜の庭の涼しさ見てもまたまたの月影

氷室

ゆく河も雪もきえてや夏来てもこそ氷室の山の下かけに

夕立

風はやく物ねもはけしくゆふたちの雲もいまはやみの空ふりしく

池杜若

咲ころは花そちりしく池水にうつる色こそふかくにほへる

時鳥遠

まつ人のとほかたなきもなかくまのほのかなる一声

梅雨

花かくれさいわしのもなかにもむかしをしのふ梅の頃の雨

蓮露

れうとも知ぬもすまき風そよるはなら千代の香のにほふぬ

菖蒲薫風

さうちたちよの軒のつまのまに風か軒やうらめしいうらし

五月菖蒲

あやめ草新ふる宿の常よへうれる宿のもとまつしみつ

菖蒲露

起のふ草とるて軒にもちうきてあやめにかけて露なりと

沢菖蒲

新たにいりき沢水のおもひかけもなにほかしの深かつり

池ゝ

池水のみきりかまの花へうつしてあやめかおかえて

江ゝ

上級の舟に香あらて江の水もあやめにかほる風ならしは

蓬ゝ

咲よりも新きふける香あるして玉のまきりぬる朝か露

園ゝ

めくりあふこそいつと秋やたつ猶かとられたる宿の軒ちめん

軒ゝ

これも千代のためしとかふにきるあやめの草に根ちかし

前ゝ

あやめかるて宿のあやめの東すかしと如く一雄風

夏暁

はれき日は雨もすゝしき野原のあつさまさりて秋のこゝちする

〃朝

たえやらし夜もあさもとしもやまし袖にゆふへのかれすゝしき

〃昼

あつらはゝ扇けさ今はあつき昼間のこそまさるらん

〃夕

もしほやく煙のゆふへさきまさる袖ふれとも秋の夕暮

〃夜

けふもまたうつろふ月に涼しさは小夜のちかれぬ

園新樹

苑の内の松は色のはるくしてしけらもいろふかくしけれ

隣卯花

となりの家とこそは中垣隔れとさかりはおなし卯の花

待郭公

はつこゑは山ほとゝきすなのりてそまつのこえさへひとこゑ鳴ら

夕早苗

夕日影もかくらぬうちにとりふく山田のさなへ急く賤の女

砌下橘

まかきの花を一きは匂はかほりみえし昔の袖

標雉家

まかやくまつ住かともいさしらぬいるかなき咲

澗夏風

浦風にすゝむ光をわすれても[illegible]の月[illegible]

隴麦

[illegible]の穂の[illegible]この花の[illegible]

渉鵜川

[illegible]鵜舟の[illegible]大ゐに[illegible]川瀬[illegible]すゝし

照射

[illegible]鹿の[illegible]の[illegible]ともすれは

瀧下雲

[illegible]瀧の[illegible]

遠夕立

むら[illegible]の[illegible]

晩夏蝉

[illegible]袖[illegible]

泉避暑

松風も月[illegible]の秋

水風涼

[illegible]風も[illegible]

夏夜

[illegible]のみの[illegible]

早苗

[illegible]田面[illegible]早苗

杜蝉

新こまきこゑのれからかくれ蝶の幸乃さゝもとも秋はくれて紅葉

重橋

松かえし夜やとおもふ頼ならかはらぬ花橘寄へのほたる

鵜川

うかひ舟ともすかゝりに大井川なみは松にかゝる大かゝり

瞿麦露

かゝなましとらくさ露のしこの露もをきゝて花えにけり

澤蛍火

かやり火の煙は流る夜はさつき出る月のさそふ蛍のかけ

蛍之窓

夕まくれてらすまた窓の中に風にたくはへの光よし見る哉

池上蓮

風ふくるたひにかほらす池水のはちすはにたまもすゝしき

顔氷室

夏まておしかものまたはやくらん山のかけには寒き氷室は

雲夕立

やまかつの衣手しめる夕立の雲もさすかに雲居をるとき夕立

樹陰納涼

涼しさのしらみ立もとに松風の猶にきたるる風にたもしも

澗邊蝉

夕まくれ松風もさしけふそこれやまにきけて池の蝉ほき

川夏祓

夜ハ雲のゆくゑもしらぬみなせ川秋としもなくふきさそふ遅風

雲中雁

時にしも一むら雨の晴やらて雲のはたてに雁の音もちかき

卯花

浦波のよるとも見えて垣ねにはかゝるとハなく咲る卯の花

聞郭公

聞こともまちこそならぬ一声ハ月もあまりの山ほとゝきす

山居夜

それ也と日数もへぬる山居の夜半のねさめハ誰かつまてこん

夏草

花さ咲秋田の風ハしけりあひて見えぬ庭の夏草

暁蛍

志のゝめハ東雲明ぬよにみえし螢ハ影うすくなるらん

納涼

夕暮の日影うつりて松か枝に吹来る風のすゝしき

夏風

清見かた沖の白波よるさへも月の影にもすゝしき

〻暁

夜来れハあけぬの空の明ぬる風も吹のこすらん

〻朝

風吹ハ夕暮もちかき川の岸の竹のさやかにそよく

〻夕

かゝる世に 松風のゆふへゝもむすふ秋のこゑをきゝ夕風にそよく

、山

松杉乃木のはけしき風寒て夜の山風ふかしらし

、河

うら舟をさすやうきれ家居やうえてとし重ね川つら

、池

さくら咲は夜もしらさく夕風に波よする池のさゝなけ

、島

え浪の浦さし入江のかたへに鶴の声も乃なくらむ

、田

うゑはてゝさなへのさきにくれはてゝ雨つゝの家残夕の皆

、草

法のもとに草葉の露の人をもまつ

、花

うすくこき花を花にさかれの色にもやさしき花

、神祇

神風やいすゝ川のなかれの末もたのしき代の

、山家

新たに住なれし松風の庵もすむ山乃おくに住

、旅

行つきぬ日かすをかさねて旅ころもきのふはけふの

、述懐

秋近き窓に螢もまれに見えそめて夜もふけゆく夏をしらする

晩夏

風ふきかよふ涼しさもよに夕立ぬる雲のむらさめ山のは

卯花似垣

咲そへていつともわかぬ中垣もさらに雪かと見る卯の花

螢照水草

ほたる見ゆる沢のへの草の葉の光もここにうつるなりけり

夏衣

立かへり夏にはなるる袂にも卯の花かさねいつか衣手

樹陰

立よれは袖にも涼しさ夏をまつ梢やこの木陰なるらむ

蝉

ゆふ暮のなこての声を松風にまかへて涼し蝉の諸声

暁鶏

一声の鶏はいそし明やすき夜を残のしらむかたかな

夏草

茂る野のかりは夏草しけるとも分ていつれと庭の夏草

夜時鳥

ほとときすまたしはしのみなかねともさすかに月のかけやいてけむ

暑夜

くれとたにたえぬあつさも月影をまちえて夜はすゝしかりけり

樹陰蝉

志るへなき小山陰にはなく蝉乃声にしられて影をあふくは

更衣

夏来ぬとけふよりかふる衣手に色を思ひかへしき花染乃袖

待郭公

いくたひか待えしかひも因しもとこそとや又山かけにきかす

時鳥遍

ききそれ乃花の宿には声をかはさすや声のほかにはいく月にやくしほ

橘

たちはなや香をもみたれて又風にさそはれしの昔の袖のかほりなるらん

夏月

夏衣あさをねりて涼しき月に秋乃心や通ふらん

蚊遣火

いふせきもおのかさまゝに住みなれし賤か屋の夏をかやりひのかけ

螢

夏草のしけみのほかにみえつゝも玉とみたるゝ螢なりけり

夕立

一むらの雲の行かたに山風にさそはれてきぬ夕立の雨

六月祓

ことの川にのかすてし大ぬさのなかれて瀬々を涼しと流して

葵

かけてこそみとりあらはれてあふひ葉も二葉にさしてかさしをる

時鳥

けさきすみつきぬれともたひらかにみやこにゐてしもなし

橘

こしかたのむかしを宿のはなたちはなかほるらんいまもかはらて

森

ゆふくれは人もかよはぬ夏の森いつしかあきのかせそすゝしき

蝉

なくせみのこゑもしけきに夏の日はすゝしき森に秋そしらるゝ

扇

あつき日もかさす袖とてすゝしきは扇の風に秋をかくして

泉

むすふ手にいつみのみつのすゝしさをゆく人たちよるすゝしさ

卯花似月

さらてたに卯の花さける宿はあれ〇月まちえても月の影かと

待郭公

いくたひかまちてもきかん時鳥またこそはなくまつの夕くれ

居待月

たれかまちゐてしるらんとはかりに木の間をもるゝ谷陰の庵

夏草露

夏ころもみちゆく袖に百合のはなおくしらつゆのやすらふもなし

蛍

夏ふかみくるゝ川の瀬とてもなくさむるかな

鵜河篝火

河嶋のいりぬる月にかけみえてすゑてゆくすゑのつゆの上哉

遠夕立

をちかたにくれぬるやまのかみなりのおとはかりして夕たちの空

郭公

をちかへりなくやまつほのかけなれや一声をなにゝたのみける

五月雨

降まさるいけの汀もたえ〳〵にこゝろをぬらす五月雨の比

夕立

なるかみもひゞきにこえて吹風にくもりてやかて夕立ぬらん

納涼

まはなくよ松の下風もすゞしくて夏の夜すからしき殿のかたへ路

早郭公

ほとゝきす一声ものをこゝろにそ待ぬるよはのねさめゆくらむ

菖蒲

さは水にひきし菖蒲の一五のかけうつしつゝなれもおもかけ

山時鳥

まつつゝ入山ひとはゆふぐれになくほとゝきすのきゝもあかすて

盧橘

昔をはしのふものから立花のにほひはかりそ花の夕風

五月雨

河ちかみかれぬ草葉に五月雨のふりつゝ水もまさる五月雨の比

蚊遣火

あはれ夕日の松の山もとにふるこゑの蝉やなくなるらん

雷過家

なりてすくやまの雲もたえたえの袖ふりてまた宿ぞありける

遠夕立

日影さすこなたの里はくもりなくをちの高ねは夕立のする

晩夏蝉

ちらさす松のしげみの夕日にもなくなる蝉の声すゞしき秋風ぞふく

里郭公

たれまつ人をまちしをもせす里わかれ鳴くはこの声

瞿麦

志津かはらす夜かけて秋風やわけ露ことに川のなみ

納涼

みな川かはかぜつゆとる杜の木陰立よれば袖に風音秋をしるかな

餘花

心ありてのこる一もとの山さくら若葉にまじり花ぞみえける

新樹

花ぞ見し梢もかはる夏木立わかばの梢の涼しさ

葵

ちかひあるかものやしろのかざしとてあふひの神の宮しき

里郭公

ほとゝぎすなれもやどりを里の名のなくらん声やまたまつ

橘

神のうつく白雲も千歳の夕風にふく秋のちらさぬ

池菖蒲

しけりあし代のこの菖蒲に吹風の香もこゝろしてうつすなり

鵜川

うかひ舟苦にも流れてすゝみけむやみもいとはぬかゝり火のかけ

氷室

夜もすからこりつる神さひまさる氷室山くるゝ風にも秋そしらるゝ

納涼

影行月の宮へにもとる夕月に秋をなしつ入る夜にもすゝしき

郭公頻

今朝はまたなきこゝろまつに聞えてもまた山ほとゝきす

橘薫風

夢もいさこよひの手枕にほふなり風にかほるの軒のたちはな

叢蛍

宿毎の野辺の草葉にやとりして千代のこほりもとむらん

植早苗

時ころは水せき入て小田毎に早苗植つゝうたふなりけり

泊水鶏

かゝれたゝく水鶏も夢を流すよ浦の芦葉の波のうきねを

雨中蛍

降しきる雨にもしける夜な夜なにもえておほかる火の光かな

垣夕顔

移ろはゝかつも咲かゝるまゝ絲おもくまさる夕顔の宿

栗夜槿

かみの井す鬼和木ゝくれ行水はさゝいつまたなつこそきこゆとまり

関郭公

くるゝ夜は関路の名のみたゝすも木の間をもらすほとゝきすかな

菖蒲

まことにはあやめをかるこそはつかのまのふしの軒の風

鵜河

かゝり火のかけみなそこにうつりゆく夜の瀬をのほる鵜川なみ

橘

ちる袖もかほる軒はのたち花の雲のはつれにほひくる宿の夕風

かはらぬ秋のあはれもおなしかたに宿の月影のやまもりくるゝ

うつろふへくなるさまも世の絲にはかなさはかりの白露のみか

思ひあまりてむかしより秋の夜もさらにおもふ風の音なる

志のふとも虫の声秋のはかなき音のこゝろにもおもひに

ゆくすゑのゆくへの夜の月すゝしくいかに秋のあはれなるらん

うらめしくも花すゝき風ふきみたれつゝよそにゆく白露の

立花のいろあはれとも心ありて吉野のやまのかけの露

世のいとはしきものゝこゝろの花の色よりもあはれなれ

秋のうきふしのなかに立ちまさるも秋の夜のかけのあはれ

吹風もさそふらんとおもふらん秋のこゝろの花のこゝろ

あはれなる花のさかりの風をたにおもふの月もかなしき

むかしより今もかはらて九重にみえつゝ伝はるためしなきしらるゝ

水鶏

枕の上にかはしそめてねたよもすからたゝくなるはいつくるへしとも
みしかよも明る人とゝもにふる夜の上いかゝ白水鶏の声をきゝそめつる
ほのけいてもありさゝぬ宿の戸いかにさゝくら秋の夜のありあけなる
夏さむき柳さけて夜の月も秋風中にてゝ水鶏たゝく秋の
さそてふめくりは夜の夜のみすゝしいふ人もなりなからしけるらし
たのしはよはさめよするにかひなきそてにたゝく鶏つてをきゝ
世の中はまたをくらしまたもとかへらぬ人の世たにかけるなるらし
さらてふ宿ことにかるしか戸の夜鳥はいまたも鶏の声ききつけてちん
枕のうへに寝覚て月なひらしきをき時にあかてなく水鶏ときゝます
かのうす宿には木戸の月影くをまちくたひしかたにも覚えなれは
夏の夜の明りすらふ川の光にいさよふ月も見えぬらん

早梅

冬こもりさきはしめぬる中に立する梅の花の香
こゑならはかのさきの花ののかをゝさする時のあけぬなからむ
一むらの色をさらにみるをききの里に出て俤にほふ梅のしたをち
のこすふて人を里の月影をもとゝいふるれ新にいつれのの花のをちかた
こゝろにやかひなくいろまさりてたへなるゝいくらか花咲をさへきて世に里
花みもさく香は里ことに見えし梅か新らしく一本かはりて咲る梅
いつきさるはいかるわりしのかねて見ん花咲里の色かは
さいまうんとにほひもかすむときの君かる花咲出し香の里

とふ人宿ありて花さく山よりの里の物とて行くとぞ見しをとも
それさへんなかなか色はれなか山里にわかれの人なも心もなからすれ
此里も花ならぬもなくむかさきなる色を引いて標さく候
つれなき夜の中からの色をまてなくわかち花さく里の一ひら
花を咲かれからの中に候ていてさらん里を一見え花桜の物ことを
またうて桜さくりさらんは里をもゐるなく咲から出く この春
此里に一本ならて咲花の年々咲からの咲をもくしさ
むかさきの花をかならしまこそ咲から咲きて里の中に咲あれ
咲けり高いそれ御山さくら物ゐの咲から花ならし 数ゝ
わかふる春の里わか○ねいは咲らんそへしゆかへ咲から咲春
くに咲あかいそのまれはる山しもの里のことくて咲くあからは

ちりぬのくせゝなる里にはさし花其一本にわかちら咲かや家
またからえらうたそことはゆりにさとに咲から花からの花に標の
をいかうて見えてあから咲の花の色に花の中の里に見え後のか
ちらら那とは咲からの花から咲たか後をさきてくたらをさ
またうてしう後里のらの○咲すゝとくあから咲を
こはくな里のちをも○出見へきゆかのをてあから咲らへ
此里の春はやの物もあるきなの咲から物咲（いつれのあた）後やくひとふは
後のすゝ里のゝを○へまくとも咲から花咲 後やとれ咲し
といかりて吉ゝゝすめんの事ゝ咲から花咲里の咲をく
といふなかゝ後に風をもすかしてやしゝ咲花咲里の中をくれ
るくりもくる物いはれはや又風とも咲からもちる里の春かう

鵜川

うかひ舟梅さへ所もなく河の瀬ハ小夜ふけて　かゞり[illegible]てゆく
こゑ淋しく雨さへ[illegible]河波もなかれ[illegible]二瀬のうへて
大井川鵜[illegible]月の出て[illegible]鵜舟かゝりし
一河原や[illegible]淋しさつゝ一さし鵜舟のかゞり[illegible]て
瀬はよく[illegible]岸の雨も[illegible]川風[illegible]かゞりし
[illegible]鵜舟川[illegible]淋しからさ[illegible]
さよふけて[illegible]の大井川淋しさ鵜舟かゞり火の[illegible]
河原の[illegible]鵜舟川淋しかゞりの影も[illegible]て
夕川にかゞりの[illegible]うき世のかゞり[illegible]
うかひ舟[illegible]て河淋しくすゝし[illegible]かゞり火の瀬

さよふけて[illegible]森の大井川浪[illegible]てゆくかゞり[illegible]
あはれさハうつりもすゝし[illegible]鵜舟[illegible]かゞりの影
かゝり火ハ[illegible]淋しきて[illegible]うかひ舟梅さへつ[illegible]川か[illegible]
大井川[illegible]淋しさ[illegible]かゞり火の[illegible]
はしふけて[illegible]鵜舟[illegible]かゞり火の淋しき
うかひ舟[illegible]かゞりの影[illegible]淋しかりし
こゑ[illegible]の影も[illegible]風さへて[illegible]
世の中を[illegible]夜のよ川[illegible]うかひ舟かゞり[illegible]
瀬ハよし[illegible]の月の[illegible]川[illegible]
淋しさも[illegible]うかひ舟[illegible]かゞりの淋しき[illegible]
こゑ[illegible]舟の影[illegible]うかひ舟[illegible]浪の川[illegible]

水のこゝろはおなしきよくふかき川瀬なからなかれしのとかなり
ひとしくこゝろにかゝりつゝ道ゆくゑものかけをとゝめゆく
かのおほゐの山口のれいのきしのみなもとにかはらてかゝりゆく
こゝには井堰つくりて大井川とよひてくたりゆく水の流
水底まてうつるもすゝしかつら川にそゝく水のかけをさへの
流のきよきいはほのうへにゆく水のなかれをもとめてゆくに
こゝは名たゝる月のかけなほやとりけるかたちのまゝにみえて
大井川いはなみもおなしところにてたゆたふ水のゆくゑ
こゝはふねさしてまくさのほとりをとゝむるところ
なかれ川のみのかけをもとめてさそふ水の流にまかせて

泉

ほとゝきすなく山のはにかけなきかなしくもおもほえ川
ゆきかひつゝ山をふみわけ過しかたのゆくゑをしのひ
まさきのかつら花のちりしをもとめてしのふ
あれはのちのよのこゝろをしるへにて
ゆくゑをわかるゝよのなかにすゝしきこゝろの水の
とりかへしのつゆもあはれなるにのこる水のなかれ
きしのうへにはるかなるたにのかけをたつね
さくらのかけにやとりてすゝしきなかれのゆくゑ
ゆきてみる風のおとにきく水のなかれのしらなみ
ふかきこゝろのかたみをとゝめてゆく風のおと
またなかれのふかきにしるへをもとめて秋のかせふく

露ちかき山もとしけきこゝろにそほとゝきすの声になかりける
むすひおくかことはかりの松風に我やまつらん年のくれかた
はるかなる思ひの玉ちるなかにもさとは松風をりしかく野
むかしより立よるかけもはなれねはさそいまそらに月のこゝろも
思ひねの夢ちにきえて待ことはかなしきものをなれてそつらき
待出ん月やまつはするをもほのかにのこしむかふみち
はるか思ひ見つる心を立よりて月のくらさを物とこすらき
山の端の月にこゝろを立よれはいとゝ友なく秋にそすみける
さためなきいさよひ月のつき秋のそらにそ西にかたふく
夜ふかしうまきの月の思ひとそしれぬ春の雲にかゝるなり
おほつかなしはしたちよる冬の水にさしみえそふらんいつとはしらて

夕しくれこまちかね立ちてそよくらし山の端にかゝる
あはれさもおなしこゝろのおきの葉に風の思ひそまちえぬれしるき

荻

秋風のまたくれもはてぬいつしかと荻の上葉をうちそよくなり
月雪の色にそ思ひかけそよくるかせの夜もすからなかれぬるなり
まねきとそ見えてもよわき風のおとすそのはにそよきつゝ
いつくとも秋の風をはおもはてもなにかはそよくおきのうは風
なかめそる身をもあはれにおもへとも秋のゆふへそいとゝかなしき
まつなかにおきのうは風立ちよりてきゝつるまゝに秋のおもへは
おのつからいくよの秋をまちかねてあはれおもひをしらす荻の葉
ゆふくれはさらてもむすふ荻の葉にそよくかせのおとそくるしき

風ふけはいとゝすゝしくおほゆるは手にならす扇をおきて今す

またゆふくれにならす扇を去年のあき風やしらぬこゝろ

いにしへのよをかへて秋きぬと思ふ扇の風のすゝしさ

まきかへりならす扇を無て秋見ぬ思ふ風ぞすゝしき

森のしたかけしはしやすらふならす扇の風のおもふ

夜ひるのほのかにまつもかけてならす扇の音のまほしき

袖やのこるとまた秋風はいつかならす扇のみぬさにて舞

夕まくれなれぬる風をたゝしさて扇ならす風のすゝしさ

志すこゝろはあさもゆふ手にならす扇の風のしはし一

夕なにもかならすほやさは此秋のまつのかせ

いつもとくめく秋よ待らし室のうちにならす扇の風かな夜

まだ秋の風をきかねはならすらん袖のの扇は手にならすてこ

ほのかにもまたよしならす扇の風の秋そまつしき

まならす室のあつさに風そよくまつほのかにもなつされて

まなさす扇は風なまつとさてほのかにそとの夜のそ

夕すみほのかにもまつならす扇の風を夜としあらき

日本政府圖書

内閣文庫

69.

国立公文書館
National Archives of Japan